

## 米国における交通の諸情勢

中部大学 小沢 昭弥

クルマ社会としてはアメリカは先進国であり、交通事故、排気ガスなどについても色々と先進的体験をしている。またアメリカは、人口2億44万人で日本の約2倍ではあるが、国土は20倍であり、広い土地に住居や工場が散在しているのでクルマは生活の必需品であり1台あたりの走行距離も日本よりはるかに大きい。従ってガソリン代は、日本の4分の1（1ℓ 35円位）という安さでこれを少し値上げしても社会問題になる程である。またアメリカは、カルフォルニアについてみるとその人口の40%が英語を母国語としない、殆ど英語の話せない人が生活しており交通事故、傷害保険、運転免許の与え方も日本とかなり異なる。

交通関係でどんなことが、最近新聞種になっているかについて紹介し、アメリカ社会が今どんな方向へ動きつつあるかについても私見を述べる。

1. 交通事故の統計：アメリカの事故統計とその分析は毎年1冊Accident Factsという約100頁の本（National Safety Councilから出版）に出ている。その1992年度版によると1991年の登録車の数は19500万台、免許保有者は16900万人、事故死者は43500人、負傷者は180万人と出ている。統計でみる限りでは年間の事故死者は近年大体一定しているが、車の全走行距離が急増しているので走行距離あたりの死亡者は毎年減少している。この本には交通事故死者だけでなく、交通事故の負傷者について、社会的にどの位の損失（費用）になるかなど、いろいろな分析が出ている。

2. 排気ガスによる空気汚染：カルフォルニアはsmogで有名であるがその原因はクルマの排気ガスによると考えられ、排気ガスを出さない電気自動車の導入を義務づける法律が最近制定された。これによると1998年には新車の2%（約34000台）、2003年には10%（170000台）の電気自動車を販売しないメーカーは他のクルマも売ってはいけないことになっている。

電気自動車としては電池が問題で現在の鉛電池では重すぎ電池が全重量の40%にもなり十分に満足できる走行状態が出ない。そこで演者らが最近研究しているリチウムイオン電池、陰極は炭素、陽極はMn酸化物を使って、ガスタービンとのHybrid車をつくる企画についてその大要を紹介する。

3. 飲酒と運転：ポケットに入るアルコールセンサーが1万円位で入手出来る時代になったので、これをどう交通安全に生かすかについて、佐藤厚教授との共同研究の結果を報告する。

多くの人は、ビール1本、酒1合飲んだあと30分待てば血中のアルコール濃度は法律の規定値以下になることがわかった。それでは、その状態で運転してよいかどうか？につき私見を述べる。

4. スピード：1988年頃からクルマのエンジンが強力なものになり、特に若い人が馬力の大きいエンジンの車を買うようになって以来、スピードの出しすぎによる事故が急増し、24歳以下の人の死亡事故は全体の35%に達している。これにつきどんな対策をたてるかは本研究会としても委員会でも結論を出し、社会に提言することが必要である。

5. クルマ社会と保険のあり方：事故が多いから保険をかけることは個人としてはクルマ所有者の必須事項であるが、あまり保険料が高くなるとかけられない人も多く、保険システムの運営が困難となる。これにつきアメリカでは、no fault insuranceという方式もかなり実行されてきている。つまり事故そのものより裁判で白黒をきめるのに金と時間がかかりすぎて、全保険システムが運営不能になるから、これをなんとかしようということである。

6. アメリカでの免許のとり方：日本よりはるかにやさしい。また中国語、スペイン語、韓国語など英語以外の言葉で筆記試験をうけることもできる。このアメリカの免許取得に関する実情についても述べる。